

早崎内湖魚類相調査

米田一紀・根本守仁・片岡佳孝

1. 目的

早崎ビオトープは 2001 年から湛水され、水産試験場では 2005 年度から当水域における魚類生息状況やニゴロブナの標識放流試験を行ってきた。当初、早崎北区、同南区、琵琶湖岸区（丁野木川河口右岸）の 3 ヶ所を定点として魚類相調査を行ってきたが、南区、湖岸区は植生の変化により小型定置網の設置ができなくなった。現在は早崎北区においてのみ魚類相のモニタリング調査を隔年で行っている。

2. 方法

2016 年 6 月、9 月および 2017 年 2 月に小型定置網による魚類相調査を行った。12 月は工事のための水抜きが行われ、畔が露出する程度まで水位が低下していたため調査は行わなかった。小型定置網の設置時間は原則 24 時間とした。採捕個体は水産試験場に持ち帰り、種類分け、計数、測定を行った。

3. 結果

確認された魚種は 6 種（フナ類、モツゴ、タイリクバラタナゴ、ヨシノボリ、カムルチー、ブルーギル）であった（表 1）。甲殻類は 4 種（テナガエビ、スジエビ、ヌマエビ、アメリカザリガニ）確認された（表 1）。個体数が多かったのは、モツゴ（7,007 個体）、タイリクバラタナゴ（114 個体）、フナ類（123 個体）であった。2008 年以降増加が懸念されたブルーギルは、2012 年度の調査においては確認されなかったが、本年度は再度確認された。また 9 月の調査では調査地点付近の岸沿いにおいてメダカが確認された（表 1）。これまでの小型定置調査において採捕された魚類種数は、2005 年度 8 種、2006 年度 7 種、2007 年度 11 種、2008 年度 16 種、2010 年度 14 種、2012

年度 9 種、2014 年度 5 種および 2016 年度 6 種と推移している（図 1）。2008 年度および 2010 年度にかけて確認種数は大幅に増加したが、水門の閉鎖された 2012 年度以降は種数減少・魚類相単調化の傾向にある。今年度まで継続して確認されている魚種はモツゴ、フナ類、タイリクバラタナゴである。これらは一般に低酸素条件や環境変化に強いと言われる種であり、魚類の生息環境としては過酷な状態になっていると考えられる。一方で、そのような環境はオオクチバス、ブルーギルの生息および繁殖も阻止する要因となっていると思われる。

表 1 早崎北区魚類採捕状況

魚種名	6月	9月	2月	計
フナ類稚魚	94	8		102
ギンブナ			21	21
モツゴ	6971	32	4	7007
タイリクバラタナゴ	56	58		114
ヨシノボリ	65			65
メダカ		9※		9※
スジエビ	49	167	1	217
テナガエビ		1		1
ヌマエビ	6	1		7
カムルチー	2		3	5
ブルーギル	4	6	1	11
アメリカザリガニ		2		2

※メダカはタモによる採捕

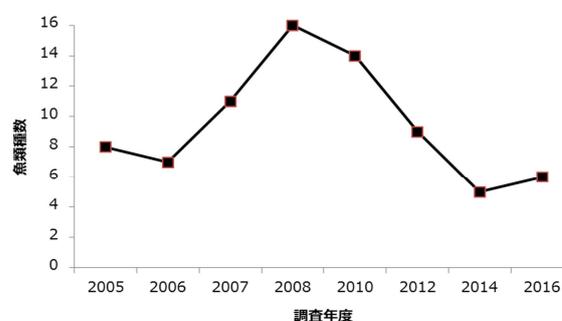


図1 確認された魚類の種数の推移